The World-view in the Renaissance Period: *Astrologia* in Consonance with *Cosmos*

ルネサンスの世界観：共鳴するコスモスと占星術

九州大学大学院　平岡　隆二

はじめに

現代社会に生きる私たちには、マスメディアを通じて日々大量の情報が届けられますが、その中には占星術に関する話題が少なくありません。若者向けの雑誌やテレビのワイドショー、あるいはそれこそ星の数ほどあるインターネットサイト等を見てみると、「今日のラッキー星座は？」といった記述が数多く見受けられます。そのことはアロマテラピーに関しても例外ではなく、「12 星座別アロマ」「あなたの星座に相性の良いハーブは？」といった記述も、既に馴染み深いものになっているのではないでしょうか。

しかし現代においては、そのような記述の提出する占いの結果（とりわけ良い方の結果）が注目されることはあっても、占星術そのものが全面的に信頼されているわけではありません。むしろ私たちの多くは占星術に対して、「興味はあるし、時にはその結果を利用したりするけれども、結局はあてにならないものなんじゃないの？」というイメージを持っています。確かに私たちは小さな頃から、学校の理科などで教えられる近代科学的な世界観に慣れ親しんでおり、そこでは占星術の原理の多くが否定されているわけですから（例えば、人間の運命や植物の効能を支配する惑星の存在など）、このような事態も当然のことだと言えるでしょう。

ところが、その近代科学が誕生する以前、とりわけルネサンス期の西洋へ目を向けてみると、人々の占星術に対する態度が今と全く違うものであったことに気づかされます。それはハーブを含む植物全般と人間との関係を語るうえで必須の知識として認められていたばかりか、人間の存在そのものや世界の仕組みを理解するための最も重要な知識の一つと考えられていたのです。彼らルネサンス人たちは、なぜ、そしてどのような根拠に基づいて占星術を信奉していたのでしょうか？本稿では、占星術に対する彼らの信念のルーツをさぐるために、ルネサンスの占星術思想が根ざしていた世界観について、大まかな図式化を試みたいと思います。

「天界」と「地上界」

ルネサンス期に占星術を信じていた人々の多くは、それを単なる迷信として盲目的に信奉していたのではなく、彼らなりの「合理的」あるいは「学問的」な根拠にのっとって信奉していました。すなわち、現代の教養人が、近代科学の知識を通じて世界の構造や生命の進化について考えるのと同様に、ルネサンスの教養人たちも、多くの学派から取捨選択した彼ら独自の哲学を持っており、占星術はそのような哲学（あるいはそれによって形成される漠然としたイメージ）と密接に結びついていたからこそ信じられていたと言えるのです。

PROFILE
Ryuji HIRAOKA
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程在籍

1974 年、静岡生まれ。
2001 年 3 月神戸大学大学院総合人間科学研究科卒（学術修士）

連絡先：E-mail:long-er@pop17.odn.ne.jp

ルネサンス期の教養人が思い描いていた一般的な世界の姿（イメージ）とは、図1のようなものでした。この図に見られるような世界像は、古代ギリシャに端を発し、その後17世紀に至るまで、西洋の幅広い層の人々に受け入れられていたものです。まず、図の中央に注目してみますと、宇宙の中心には不動の地球が位置し、その周りには水の層が囲さらにそれをすっぽり包み込むように空気、火の層が続いています。さらにその火の層の上には、月や太陽などの惑星を運ぶ「天球」が順に折り重なり、最後に「至高天」と呼ばれる天球がその下の全てのものを包み込んでいます。近代科学誕生以前の西洋の知識人たちは、世界について考えるとき、いつもこのような階層的な球形世界を想定していたのです。

さらに彼らはこの世界が、性質・構成要素が全く異なる二つの領域に、すなわち「天界（月の天球より上の世界）」と「地上界（月下界）」に二分されると考えていました。

「天界」の物質の全ては、第五元素と呼ばれる「アイテール（あるいはエーテル）」によって形成され、その性質は「永遠」「不滅」にして「完全」であるとされます。それに対して、「地上界」の物質は、土・水・空気・火の四元素によって形成され、その性質は「生成」と「消滅」であるとされます。そこは、あらゆるものが崩壊しては誕生する、幼老生死の領域です。そして重要なことは、この二つの領域の間に明確な因果の関係があるとされたこと、

図1　近代以前の世界像

すなわち、「天界の星々の運行は、地上界のあらゆる変化の原因となっている」と考えられたことでした。これは現代に生きる私たちにとっては一見奇妙な思想のように思われますが、彼らはそれが極めて常識的かつ日常的な経験――たとえば、太陽が天を一周する周期である「一年」が地上の寒暖や多くの生命の生誕の周期と一致していることや、月の巡りが潮の干満の周期に対応していることなど――によって裏付けられると考えたのです。

以上のような世界像をルネサンスの人々に広める上で決定的な役割を果たしたのは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスの存在でした。彼の哲学は、中世・ルネサンスを通じて正統的な自然哲学として容認されていましたので、上のような世界像がさまざまな形で西洋の知識人の間に広く流布することとなったのです。また、このアリストテレスの哲学を占星術と結びつけたのが、紀元一世紀のアレクサンドリアに活躍した天文学者プトレマイオスです。彼が著した占星術書『テトラビブロス』は、ルネサンス期にいたるまで占星術の聖典として広く認められるのですが、そこでは天界の地上界に対する影響が次のように述べられています。

「アイテールのような目に見えない性質から発する力が分配され囲地球の周りの実に変化しやすいすべての物質に浸透することは、誰にでも容易に証明される。またアイテール自体は残りのすべてのもの、すなわちその中にある土、水、植物、動物を取り囲み変化させるのである。」

このように、古代からルネサンスに至るまで脈々と受け継がれてきた伝統的な自然哲学は、占星術思想の最も根幹となる部分、すなわち、「天界の徴を介して地上界のあらゆる事物の運命を感知する」というロジックの土台を提供してきたと言えるでしょう。世界の二極分類の構図と、両者を結びつける強力な因果律。これこそ、占星術理論をその背後で支えた「概念装置」だったのです。

マクロコスモスとミクロコスモス

さて、先にみたような図式と平行する形で、もう一つルネサンス占星術の背後にあった重要な世界観、あるいは概念があります。それが次に見る「マクロコスモスとミクロコスモスとの共鳴」という概念です。

「ミクロコスモス（小宇宙：人間のことを指します）はマクロコスモス（大宇宙：人間を含む全宇宙のこと）の雛型である」とするこの考えは、古代ギリシャの哲学者であるピュタゴラスやプラトンにさかのぼるものですが、ルネサンス期には彼らの考えを受け入れ、さらにそれを発展させようとする哲学者たち（その多くは占星術師でもありました）が数多く現れました。例えば、この考えを強力に推し進めた哲学者の一人であるアグリッパは、

「人間は神の最も美しく完全な業、神の似姿であり、また小宇宙である。それゆえ、さらに完全な構成、美しい調和㊀崇高な威厳によって㊀人間は自らの内に、数・長さ・重さ・運動、元素その他全ての構成要素を含み維持しているのである。最高の作品におけるのと同じように、人間のうちで万物は良い状態にあり、他の混合物において万物が持っている通常の協和をはるかに凌いでいる。」

と述べています。ここに見られるように、マクロ・ミクロコスモスの共鳴という概念の根底にあるものは、「神の創り給うたこの宇宙は、最高の秩序と調和に満ちている」という信念と「人間という存在は、その宇宙の全ての性質を自らの内に体現し、それら全ての潜在力を所有するものである」という信念との結合にありました。最高の製作者である神によって創られたこの宇宙、すなわち「コスモス」cosmosが合理的なものであり、その働きを理解することができるような「秩序ある体系」であるという考えは、ルネサンス人の深層意識に通奏低音のように鳴り響き、あらゆる哲学・宗教的営為の強力な牽引車の役割を果たしたアイデアであったと言えます。そもそも、このコスモスという言葉は、ギリシャ語で「秩序」や「装飾」を意味するもので、「コズメティック（美容の）」cosmeticという言葉もこれに由来するものです。そして、決して乱れることなく、規則正しく循環する天上の星々の運行は、そのシンボルの最たるものでした。そのような美しい秩序に包まれた天上の世界と人間とを結びつけるために、彼らはさまざまな類似（アナロジ）や象徴形式を駆使しつつ、宇宙と人間とのホリスティックな関係を構築しようとしたのです。

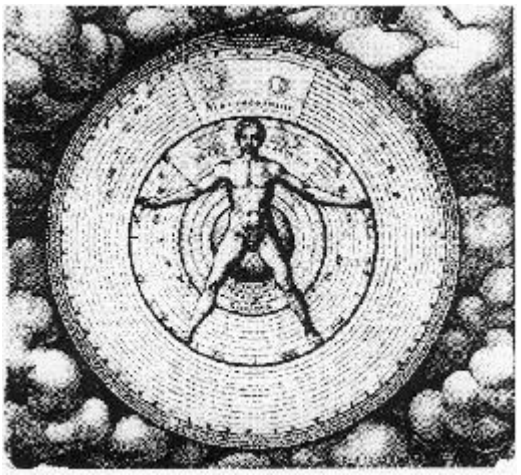

図2　マクロコスモスとミクロコスモスの共鳴

たとえば、ルネサンスを代表する哲学者マルシリオ・フィチーノは、人と世界とを仲介する絆としてプラトンの言う「世界霊魂」を掲げ、そこから人間と世界との関係を理解しようとします。彼にとっては、人間の霊魂も、肉体と同様に、天界からの絶えざる影響力を受けるものでした。

「われらの霊魂の諸力が、生ける精神によって肉体のそれぞれの部位に指定されているように、世界霊魂の力もまた、生きた精神として世界の肉体の中で働いている第五精髄の力によって、すべての存在の中に広がるのである。そしてこの力はとりわけ、この精神に一番あこがれているものに浸透しやすい。星辰の中には、図形、元素、特性という形で、下界の全てのものの形と特質が含まれている。」

また、フィチーノは医者でもありましたが、彼の考える医学ももちろん、占星術を通じて宇宙全体と人間とが密接に結びつくものでした。彼にとって、太陽や月の人間に対する影響は、もはや自明のものとなっています。

「太陽は中天に昇り、我々の内にある生命精気と動物精気を驚くほどに賦活する。逆に太陽が沈むと、両精気とも弱まってしまう。そのため、全能なる神の管［ラッパ］たるダヴィデは、琴を弾き謡うために起き出して、「夜明け前に起きることの虚しいことよ」と叫んだのだ。つまり、昇りゆく太陽は、我々に恵みのことごとくを与え、我々の精気を刺激し、啓かれた精気を驚くほど崇高なものへと導く、と言うことを告げているのだ。預言者のごとき太陽は、その到来によって、眠っている人間にいともたやすく様々な預言を与えると一般に信じられていることについては省略しよう。アリストテレスが小さな太陽と呼んだ、太陽の妻たる月も同様に、上昇する際スピリトゥスと自然体液とを賦活し、沈む際は弱まらせる。」

また、数あるルネサンスの医師の中でも、特にパラケルススの哲学の中に、このような思想の医学・薬物学に対する全面的な適用を見ることができるでしょう。彼にとって、マクロコスモスとミクロコスモスの共鳴の関係は、医学的な治療のすべての前提を成すものでした。

「何よりも先ず、医者の知らねばならぬことは、天の哲学の取り扱う他の半分の部分、すなわち天界において人間を理解することであり、人間を天界に移し、天界を人間に移すことである。さもなければ、人間の医者たり得ないであろう。なぜなら、天界はその領域に肉体を半分包含しており、したがって、半分の数の病をも包含しているからである。この半分の病について知らなくて、どうして医者たり得ようか。」

ミクロコスモスたる人間は、存在の鎖の中心にあって、天界と地上界のつなぎ目として機能している。これこそルネサンス知識人の深層意識に、あたかも通奏低音のように鳴り響き、占星術に対する信念をさらに確実なものへ高める役割を果たした概念だったのです。

おわりに

ルネサンスにおける占星術思想は、彼ら同時代人が自分自身や世界について持っていたイメージの上に成り立っていたものでした。彼らは、単一なものとしてのこの宇宙が秩序だったコスモスを保持しているということを決して疑っていませんでしたし、天界の構造、存在の階層を理解することによって、はじめて人間というものが理解できると考えていたのです。我々現代人にとっては一見魔術的に見える占星術の原理も、彼らの持つこのような世界観と密接に結びついていたからこそ、広く受け入れられたと言えるでしょう。

参考文献

S.K.ヘニンガー Jr『天球の音楽：ピュタゴラス宇宙論とルネサンス詩学』（平凡社、1990年）.
S.J.テスター『西洋占星術の歴史』（恒星社厚生閣、1997年）.
S.K.Heninger Jr, The Cosmographical Glass: Renaissance Diagrams of the Universe（San Marino：The Huntington Library, 1977）.
Paola Zambelli (ed.), 'Astrologi hallucinati': Stars and the End of the World in Luther's Time（Berlin：Gruyter, 1986）.
Edward Grant, Planets, Stars, and Orbs: The Medieval Cosmos, 1200-1687（Cambridge：Cambridge University Press, 1996）.